

原水爆禁止世界大会の歴史

1954年、アメリカによる太平洋ビキニ環礁での水爆実験によって日本国民はみたび原水爆による被害を受けました。

この事件をきっかけに、核兵器の廃絶を求める「原水爆禁止署名」が日本各地でとりくまれ、署名は1年余で当時の有権者の過半数に達しました。

こうした声を背景に、1955年8月、広島で第1回世界大会が、翌年には、長崎で第2回大会が開かれました。以来毎年、世界の人々と連帯して日本で開催されてきました。

世界大会(ヒロシマ)に参加しての感想

被爆者とともに

動員された中学生が

戦争により人手不足だった広島市内では、空襲による火災の被害を抑えるために、木造家屋を取り壊す作業に8000人もの中学生、特に1年生が動員されていました。その生徒たちの大半が、8月6日の原爆により一瞬で亡くなりました。中学生を教えているものとして、とても印象に残りました。

生き残った人たちは、目の前に広がった惨状が忘れられない記憶となっただけでなく、目に見えない放射能の被害に、今なお苦しんでいます。

熱線、爆風、そして放射能



語り部さんは「原爆の熱線・爆風・放射能は恐ろしい」と何度もおっしゃいました。

熱線により未だ建物に残る跡は、いかに爆発した時高熱を発生したかがわかります。

最も大きな被害を与えたのは爆風です。一瞬で更地をつくりました。人が、吹き飛ばされたり、建物の下敷きになったり、割れガラスの標的になるなど、甚大な被害を出しました。

そして今なお被ばく者を苦しめている放射能。後になつての発症や黒い雨による被ばくは、それが原爆によるものだとなかなか認められず、現在でも裁判で闘っている方が多くいます。

世界中からこの大会に來られたり、リモート参加の訴えは、みんな平和を願うものでした。

ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ、くり返さないで

被ばく者たちの訴えからは、悲惨な状況や事実を後世に残していかなければという強い思いが感じられました。

福島県の水産業の方たちは、放射能で汚染された水を海に流そうとする国に、涙を流しながら「そんなことはやめてくれ」と切実に訴えています。

今は、被ばく二世や三世の方たちが中心に活動しています。教職員として、子どもたちがきちんと戦争の恐ろしさを学び、平和を大切にできる人になれるように取り組みたいです。



教育のつどい大阪 2022

豊能ブロック

記念講演

公教育の危機

一子どものための教育を取り戻そう

講師 鈴木大裕さん
教育研究者・土佐町議会議員

16歳で福島県に留学。そこでの教育に衝撃を受け、日本の教育改善を目指す。2019年に土佐町議会議員選挙に立候補。教育を通じた町おこしに取り組んでいる。著書「国境を越えるアメリカの教育―日本への警告」(経済書院)、「自由の危機 憲法を守る方法」(集英社・待望)など。

歓迎行事「沖縄とともに」劇「AI学園」

9月19日 月 祝 | 開会 13:30~ / 開場 13:00
池田市民文化会館アゼリア小ホール&オンライン

※新型コロナウイルス感染拡大によって、オンラインのみの開催となる場合は、9月5日に大阪教職員組合のウェブサイトにてお知らせします。

参加費無料

会場参加は要WEB予約

9月12日まで

どなたでも参加できます

お問い合わせは泉北教組まで

教職員の生活と権利を守るため、泉北教組に加入しましょう